

令和7年度 学校図書館活用推進校 実践報告書

新潟市立赤塚中学校

1. 図書館教育の目標

- (1) 進んで読書をし、自己を見つめる態度を養う。
- (2) 図書館を積極的に利用し、情報収集の技術や態度を養う。
- (3) 学校図書館活用推進校の指定に基づき、自校の実態や他校の実践を踏まえて、図書館教育の見直しを図る。

2. 実態と課題

(1) 令和7年度の赤塚中学校の実態

学級数・・・7学級	生徒数
(普通) 5学級	(R7.10.15)
(特別支援) 2学級	150人

(2) 令和6年度末の図書館活用の統計

図書館の蔵書数	9091冊
生徒の貸出冊数	983冊
生徒1人当たりの貸出冊数	6.7冊
教職員の貸出冊数	82冊
授業利用の貸出冊数	56冊
総貸出冊数	1121冊

- ・令和6年度末統計蔵書冊数9091冊（令和6年度は6学級の図書標準7360冊）で基準を満たしている。
- ・令和6年度末貸出冊数983冊（生徒1人平均6.7冊）であった。

(2) 図書館の位置

図書館は3階校舎角にあり、階段からすぐのため、比較的足を運びやすい。また、佐渡弥彦米山国定公園とラムサール条約登録湿地である佐潟を一望できる自然豊かな眺めや60年以上にわたり世話をしている白鳥が（現在の白鳥は36代目「スイ」）図書館の窓から見ることができる。

(3) 令和7年度前期学校評価アンケート（7月7日～22日）の結果からみる生徒の読書に対する意識

◎学校評価生徒アンケートの結果

- ①「本を読むことは好きです。」⇒全校生徒評価（「あてはまる(27.1%)」「ややあてはまる(36.4%)」）は6割以上の生徒が「読書好き」ということがわかる。
- ②「学校や家でこの1ヶ月に紙の本や電子書籍（スマートフォンやタブレット・PC）をどのくらい読みましたか。（図鑑や年鑑は含めず。教科書、参考書、マンガ本、雑誌をのぞきます）」⇒全校生徒評価（「10冊以上(7.1%)」「7～9冊(1.4%)」「4～6冊(10.7%)」「1～3冊(47.9%)」「0冊(32.8%)」）は6割以上の生徒が1ヶ月で1冊以上は本を読んでいることがわかる。しかし、0冊が3割以上なのは、令和6年度後期からの特徴と課題でもある。また、令和6年度末の生徒の年間貸出冊数が1000冊を超えることができなかつたため、今年度は年間貸出冊数を1000冊超えられるような図書館教育活動を実施したい。

(4) 図書館の利用状況

- ・ 昼休みを中心に本の貸出・返却を行い、主に図書好きの生徒が利用している。
- ・ 生徒の貸出だけではなく、定期的に教職員も図書館を利用し、職員も読書をする雰囲気作りや読書啓発活動を実践している。
- ・ 図書館利用の生徒は、昼休みや夏季休業中の図書館開館日などで「学習の場」として、宿題やテスト勉強に活用している。
- ・ 図書館や司書室前の廊下掲示板の季節の掲示物やポスターなどに興味・関心を抱く生徒が多く、本の利用以外の生徒も頻繁に図書館を利用している。
- ・ 学年が進むにつれて、図書館の貸出利用度が低下する傾向が見受けられる。複合的な要因もあるが、一方で、年間貸出数が100冊近くになる一部利用者もいる。図書館という「居場所」としての機能は果たし、図書館を好む生徒は多いが、「本を借りる」という活用まで結びつけることが難しい。利用者の二極化が顕著である。

(5) 赤塚中学校図書館と生徒の実態から見てきた令和7年度の課題

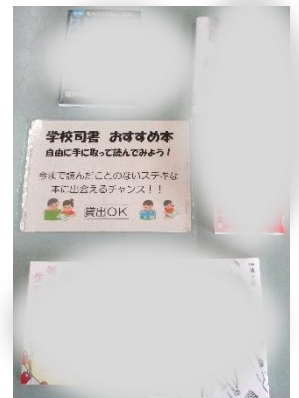
- ①本や読書に親しみやすい「読書センター」としての図書館利用の確立。
- ②主体的・探究的な学びの活動を支援する紙ベースの「本」や「辞典・百科事典」といった資料の良さを伝える「学習センター」としての図書館活用の実践。

3. 具体的実践事項

3-1 「読書センター」としての図書館の取組

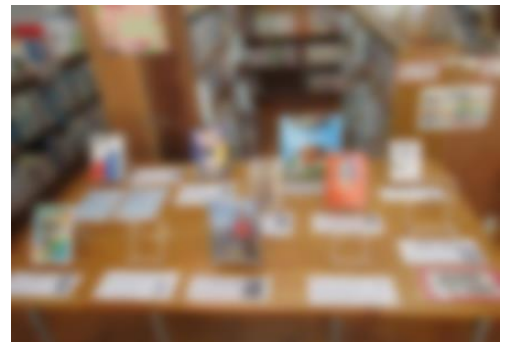
(1) 司書の「押し本」紹介コーナー

季節や行事などを意識して、閲覧コーナーの机の上に「司書おすすめ本」を展示した。「他に先生のおすすめの本はありますか？」と尋ねてくる生徒も増え、司書と生徒のコミュニケーションを作るきっかけとなった。また、生徒が普段なかなか手に取ることが少ないジャンルの本を月1回のペースでテーマを変えて全15冊展示した。さらに、情報発信委員会が毎月発行している「Library」では、「おすすめ本紹介コーナー」に5～6冊程度紹介して図書館の特設ブースで本の展示をした。



(2) 新刊紹介コーナーの設置の工夫

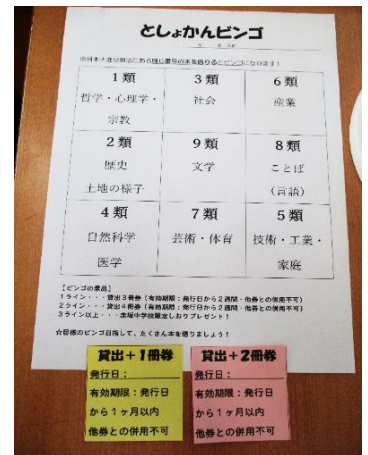
本を立てて紹介し、そのすぐ下に本のあらすじやおすすめポイントなどの紹介文を掲示することで、どんな本なのか興味・関心を抱ききっかけ作りができた。新刊ゆえに本の立ち読みする生徒の姿が見られた。また、掲示があることで、返却場所が一目でわかる工夫になっている。さらに、4月からの新刊全冊数をブックラックに展示した。



生徒から「新刊がわかりやすい場所にあるから、探しやすい!」「本屋さんで買おうか迷っていた本が、赤塚中の図書館で読めるからとても便利!」「今月の新刊がどこにあるかすぐ探せるね!」という声があった。

(3) 読書旬間中の「としょかんビンゴ」イベント開催

日本十進分類法の請求記号を意識した本の貸出や分類記号の理解を図る目的として「としょかんビンゴ（3マス×3マス）」を開催した。期間中の貸出冊数は、3冊だったこともあり、ビンゴを目指して普段手に取らない多様なジャンルの本を探す生徒の姿が見られた。1ライン達成者は「貸出+1冊券」、2ライン達成者は「貸出+2冊券」、3ライン以上達成者は「赤塚中学校オリジナルしおり」をプレゼントした。ビンゴの取組によって、「スポーツや美術の本は7類なんだ。」と生徒が請求記号に興味・関心を抱くことができた。



(4) 赤塚中学校「としょかんの日」英語絵本の読み聞かせ

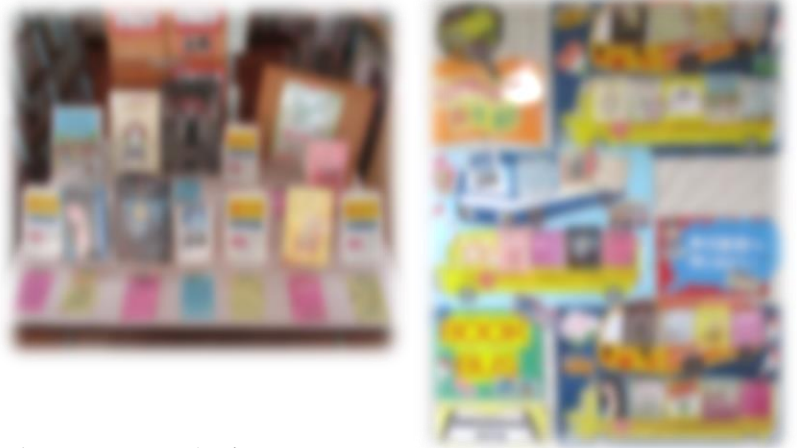
毎月14日を「としょかんの日」と定めている。令和3年度から実施している、司書による英語絵本の読み聞かせを昼休みの図書館で5分程度行った。日本語を織り交ぜながら、司書私物の英語絵本の読み聞かせをした。毎月5～6名の生徒が参加し、「全部英語じゃないからわかりやすい!」との反応から、生徒に、英語に対する苦手意識を持たせずに、英語の絵本に親しむ機会となった。



(5) 専門委員会の読書推進活動

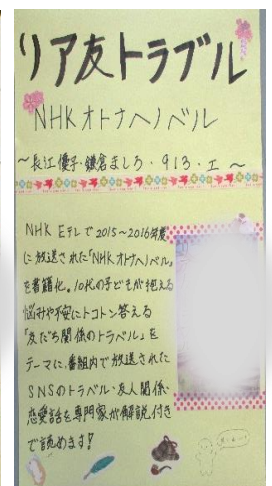
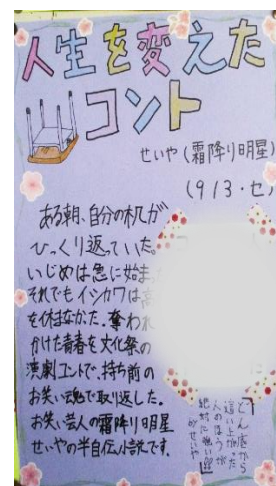
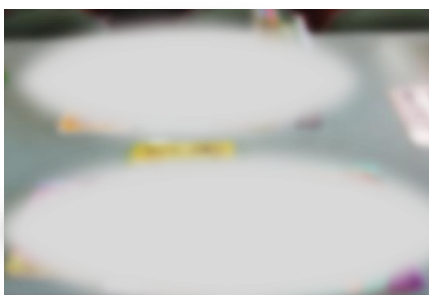
①情報発信委員会の推し本紹介

『読売KODOMO新聞』を参考に、本の紹介ポップ作成をした。読書強調週間中の図書館利用者が、「情報発信委員会おすすめ本コーナー」で立ち読みする姿も見られ、読書への興味・関心を抱くきっかけ作りとなった。



②SSP(Smile Students Project…いじめ撲滅活動)おすすめ本の紹介

毎年11月に生徒会活動の一環として、生徒間の関わり合いを深め、いじめを撲滅するための活動への意識を高める目的で行われている。約3週間の読書旬間の時期と合わせて、図書館の「いじめ」に関する本を通して、自らが友だちの支えになれる意識づけ・人間関係のあり方を考えられるような本を、情報発信委員会と司書が選んだ。図書館の特設ブースで5冊のおすすめ本をポスターに描き、紹介した。また、赤塚中学校図書館の具体的な方策(6)の情報発信委員会による生徒の主体的な活動の推進と合わせて、赤塚中学校図書館の具体的な方策(4)のPR活動の充実に準じた取組もできた。



3-2 「学習センター」としての図書館の取組

(1) 佐潟クリーン活動

毎年6月と10月に佐潟クリーン活動を実施している。赤塚中学校で白鳥保護活動をいつから実施していたのか、図書館で60年以上前から保管していた新聞記事を掲示して、白鳥保護のルーツを知る学習にも役立つきっかけ作りをした。また、佐潟をより詳しく知りたい生徒のために佐潟の関連資料を特設ブースに展示して、学習意欲を高める空間作りをした。「白鳥が教室の廊下を歩いている時代があったんだね。」と興味・関心を抱くことができた。



(2) 教科部や総合的な学習の時間と連携した資料活用の指導

①1年生 理科「動物の生態」

脊椎動物と無脊椎動物を区別する学習活動として図書資料を活用した。ホワイトボード上に動物フィギュアを、背骨があるかないか区別して並べていた。生徒同士で話し合いながら資料で調べて、「背骨がないから無脊椎動物だったんだ。」と楽しそうに分類活動をしていた。



②1・2年生 国語「短歌を作ろう」

オリジナル短歌を作成するために、図書館の資料を活用して生活班ごとに本を共有しながら短歌を作成した。タブレットで短歌作成の参考になる言葉を調べる生徒がほとんどだったが、自分のイメージに合う言葉を探すために短歌の本や歳時記から言葉を調べる生徒もいた。クラスメイト同士で「こんな短歌どうかな。」「あと5文字どうすればいいかな。」など助け合いながら短歌制作して、ロイロノートの提出箱に短歌を提出していた。

また、赤塚中学校の学校経営の理念である『すべての生徒が3年間を楽しく過ごせる学校』を目指すため、「向上を目指す3つの力」にある「自分と向き合う力」の観点を活かした短歌作りとなった。



③3年生 英語「Lesson 5 Translating Culture～世界に広がるマンガやアニメ～」

英語版の4コマ漫画を翻訳する授業では、図書館の資料25冊を用いて、効果音が英語と日本語では異なることに気づいたり、マンガ表現で使えるような表現を資料から取り上げたりして、クラスメイトと英語表現を共有していた。「日本語と全然違うね!」「この表現が使えるよ!」とワクワクしながら本を読んでいた姿が印象的な授業であった。



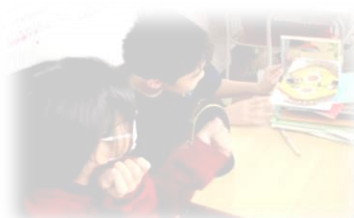
④1年生 総合「SDGsを調べよう!」

4月から1年生はSDGsについて学習している。生徒が興味・関心のある各目標のテーマについて調べたり、考えを深めたりすることができるように、図書館にも特設ブースで本の展示をして、調べ学習の空間作りをした。授業では、必要な情報を調べる「紙ベース」の資料として活用した。赤塚中学校図書館の具体的な方策(3)の図書充実と整理に準じた取組ができた。



⑤1年生 理科「身の回りの現象 光の性質(光の反射)」

かがみえほん『きょうのおやつは』(著:わたなべちなつ)を団体図書の貸出を利用して、各班に1~2冊利用できるようにし、「光の反射」がもたらす効果や性質について理解を深めた後、実際に生徒が鏡面用紙を用いて絵本を作成するための補助資料として使用した。「どんな絵を鏡みたい映してみようかな。」「こんなイラストおもしろそうだよ!」など対話しながら制作に取り組んでいた。



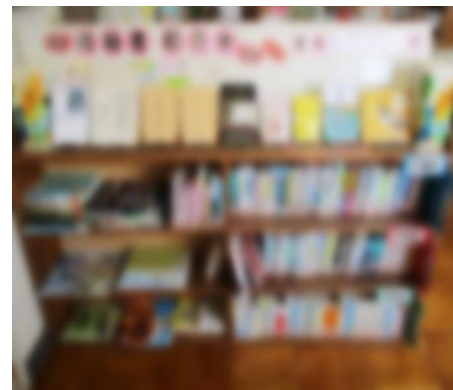
(3)「本と給食コラボメニュー」による本の紹介

11月の7日間、西川地区の給食献立の中で、本に登場するメニューと本の紹介をポスターで掲示し、放送でも紹介した。赤塚中学校図書館にない資料は、司書が公共図書館から本を借り、実物本を特設ブース展示した。生徒が興味関心を抱き、紹介本を手にとってもらえる姿も見られた。



(4) 教科書関連本の紹介コーナー

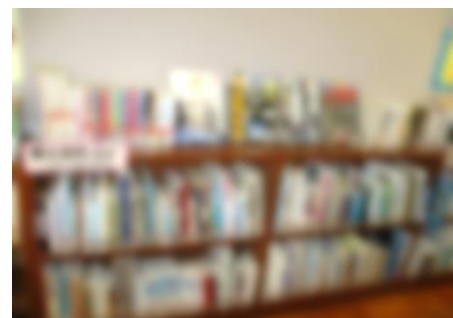
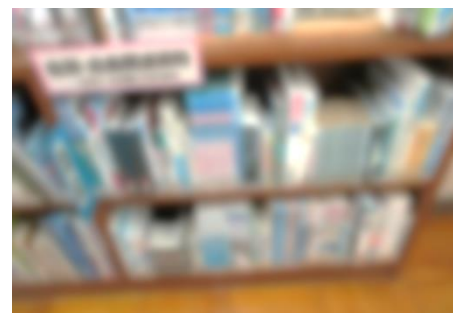
現在学習中の単元内容に沿った本を図書館入口近くに展示し、閲覧しやすい環境作りを心掛け、図書館に各教科の学習内容関連本があり、学習課題の知識を深めるための資料として利用する空間作りをした。「習った内容の本が探しやすい。」という声が聞かれ、既習内容の発展につながった。特に国語の教科書に出てくる物語（瀬尾まいこ著『あと少し、もうすこし』や俵万智著『サラダ記念日』など）は、「教科書の続きが読める」利点が有効活用された。



4. 中学校区連携

(1) 赤塚中学校区ならではの郷土資料の共有・保管

佐潟の歴史や自然保護などの本を中心に、毎年6月と10月に行う「佐潟グリーン活動」の一助とした。身近な自然環境を大切に思い、守ろうとする気持ちを育ませることや積極的に活動に取り組めることを目的として、本の紹介コーナーを設置した。「郷土資料（新潟）」と「佐潟・白鳥関連資料」の本には、それぞれ本の背表紙に青丸シール「佐潟・白鳥関連資料」と赤丸シール「郷土資料（新潟）」を貼り、一目で資料を探せる工夫をしている。そして、令和3年度から継続している小中連携を意識した取組として、赤塚小学校・木山小学校・赤塚中学校の3校で「地域教育コーディネーター室保有文献明細表」と「図書館・司書室保有文献明細表」を作成し、常時閲覧できるように図書館と司書室に保管している。

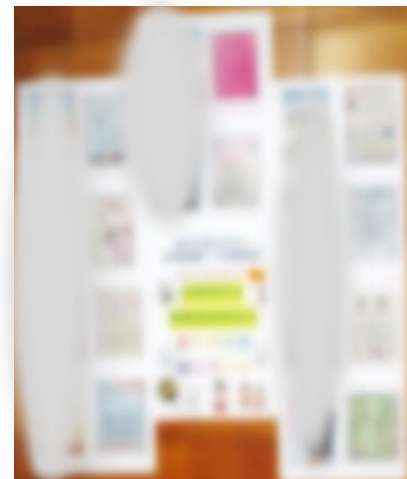
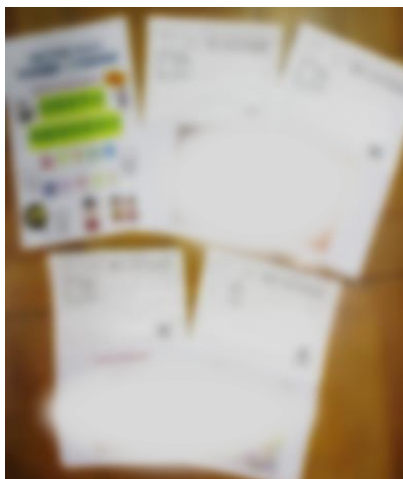


(2) 図書館だよりの交換

赤塚小学校・木山小学校・赤塚中学校の図書館だよりを司書同士で交換し、図書館活用状況の情報共有を図った。各学校の図書館イベントや取組をチェック、図書館の年間行事を確認するなど、図書館教育活動の情報共有することにより、「9年間を見通した図書館活用」の見通しを持つことができた。

(3) 図書委員会・情報発信委員会おすすめ本紹介リストの共有・保管

赤塚小学校・木山小学校の図書委員会作成の「おすすめ本」紹介リストと赤塚中学校の情報発信委員会「押し本」紹介リストを共有し、小冊子にまとめ、図書館で常時閲覧できる環境作りをした。中学生からは、「小学校で読んだことがある本で懐かしい！」や「久しぶりに小学校の本が読みたくなった！」などのつぶやきがあり、連携しながら読書推進の効果があつた。



(4) 夏休み図書館開館中の「英語であそぼう！」イベントの開催

本年度は、夏休み期間中の図書館開館日が10日間あり、52名の利用があった。地域開放として「英語であそぼう！」を実施し、英語絵本の読み聞かせや「じゃんけんかるた」ゲームを他校の児童生徒同士がペア活動で楽しく参加していた。部活動後や放課後学習支援事業の後には、受験勉強・夏休みの課題学習利用で、課題に取り組んでいた。「友人と一緒に勉強ができてよかった。」「明日も図書館に来ます。」という生徒の声があった。



5. 学校図書館活用の取組の成果と課題

(1) 「読書センター」としての図書館の役割

図書館や司書室の掲示物や図書館環境を整え、新たなコーナーを季節ごとに沿った展示を行い、生徒の図書館利用と「読書」に対する興味を広げることにつながった。また、「司書・情報発信委員おすすめ本コーナー」を図書館内の特設ブースや廊下掲示板に展示したことで、昼休みに気軽に手に取れる環境作りや生徒の興味・関心を引くことができた。さらに、司書による英語絵本の読み聞かせ活動・6月の読書強調週間と11月の読書旬間のイベントや委員会の取組も併せて、本に親しみを感じ、より本を身近なものとして認識させることができた。



(2) 「学習センター」としての図書館の取組

図書館内に学習に活用できる本を提示することで、調べ学習にも活用しやすい空間を作った。また、教科担当教諭と司書が連携し、事前打ち合わせを行い、調べ学習に必要な資料を用意した。本年度は、教科にもよるが、図書資料がメインで活用された授業が多かった。このため、本を開くとすぐに必要な情報に出会える紙ベースの「本」の利点や良さが発揮され、生徒に図書資料活用の魅力を改めて伝えることができた。

前回の令和3年度学校図書館活用推進校実践報告書の活用事例では、生徒の大半がタブレットで調べるため、本の利用者は少なく、紙ベースの「本」は、生徒が調べ方に困ったり、トピックが見つからなかったりする場合の「補助」としての機能で留まってしまっていた。やはり、調べ学習の大半は、データベースの「タブレット」が活用されることが多いため、紙ベースの「本」を活用した調べ学習の魅力や良さを生徒に実感させたり、「本」と「タブレット」のそれぞれの利点を融合させたりする活動の機会を設ける事が課題である。

(3) 今後の課題

図書館の蔵書が「補助教材」としての機能で終わらないように、タブレット学習と図書館の蔵書本が連携し、GIGAスクールを意識して学校図書館を活用した学習につなげていきたい。また、今まで以上に図書館の本や郷土資料を活用した「情報センター」や「学習センター」としての機能の魅力や活用方法を教科担任と司書が事前協議を行い、連携して取り組んでいきたい。生徒が情報活用能力を身につけるために、紙ベースの「本」とデータベースの「タブレット」から得た知識を考察・分析する力が必要となる。学校図書館は、生涯の学びの基礎・土台作りとして、主体的・探究的な深い学びの活動を引き続き支援していきたい。そのためには、全教科で幅広く活用できるよう、司書と図書館主任が親しみやすい図書館環境作りにこれからも取り組んでいく。さらに、小中連携も継続して取り組み、9年間の図書館教育を意識した赤塚地区ならではの活動を実践していきたい。